

プロフェッショナル養成への挑戦 やればできる
第1回遺伝子分析科学認定士試験に学生が受験することの意義

檜山由香里 生江麻代 谷口智也 大西英文
(昭和医療技術専門学校)

Key words : 未知への挑戦、学生への伝え方、プログラム、自信

【はじめに】時代の要請に照らして、日本臨床検査同学院では、平成19年度より遺伝子分析科学認定士試験(以下 試験)を実施した。この試験は遺伝子分析・検査に従事している技術者だけでなく、ある一定の教育担保のある学生にも門戸が開かれ、卒前に学生が資格取得することを可能とした。しかし、この試験に本校学生を受験させることについては、学内外から多くの問題が指摘され暗礁に至った。問題解決の最優先は、教員の共有化(本校の教育とは何か、教育で大切にしなければならないことは何か)と考え、行動に繋がった。その結果、学校の全面協力体制で第1回の未知の試験に挑戦した。

【対象及び方法】対象は本校における平成19年度第3学年生80名並びに遺伝子分析科学認定士試験受験者24名 分子生物関連教科のシラバス(生物学、生化学、生化学実習、遺伝学、遺伝子検査学、遺伝子検査学実習)並びにカリキュラム構成 対策プログラムとする。方法は、試験について、学生がどのように考え、どのように行動し、どのような感想を持っているのかをアンケート並びに対面聞き取り調査を行い、それらの結果から、今回の学校の取り組み方について検証する。

【結果及び考察】で、平成19年2月、学生に試験を受ける希望者を募ったところ、わずか3名(後に、この学生が原動力となる)であった。それら学生は、遺伝子の科目が好きで、将来に役立つのではないかと考えてい

た。又、この試みについて、学内外の専任・兼任教員に意見を求めたところ、学生が受験することに消極的であった。その理由として、実際に遺伝子検査に従事している者が対象と考え、受けても合格しない、未知のものに対し、どのように対応すべきなのか分からないなどの意見が多く占めた。しかし、技術能力を重視する本校では、将来を見据えての遺伝子検査に関わるカリキュラムを構築し、学生が自ら目標を持って努力できる人を育てたいと考えていた。そこで学校の“教育に対する思い”を学生達に再度伝えたところ、受験希望者は24名に至った。では、15回の対策カリキュラムを作成し、春休み、土曜日、日曜日を利用して授業を実施した。このことに対する学生評価は、学校としての対策は十分であるとの回答を得た。又、受験者全員の聞き取り調査では、将来、この資格がどれくらい活かされるのか分からない反面、遺伝子検査の重要性を認識し、努力するプロセスは、今後の国家試験勉強や社会に出てからの資格試験に役立つと考えていた。

【まとめ】今回、未知の試験に学生が挑戦したことは、専門学校としての技術能力水準を高め、50%の合格率は「やればできる」ことを立証し、大きな自信に繋がった。第2回の認定試験では、学生への伝え方、分子生物関連科目の精査と教育手法の改善、実技・動画の対策を見直し、一人でも多く受験し、合格できるように努力したい。